

## 書評

# “Keynes Hayek: the clash that defined modern economics”

(Nicholas Wapshotto 著)

高田裕久

## 1. 今日に続く怪人と奇人の戦い

第一次世界大戦後の世界は、新しい現実はどう適応していくのか、激動の時代を送った。敗戦国の巨大な賠償債務、国際通貨体制（金本位制）の再構築、そして大恐慌、深刻な失業と社会不安、全体主義と社会主義の台頭。まさに資本主義と民主主義の危機の時代であった。

この時代にあって、ケインズとハイエクは、ともに経済の本質を深く考察し、歴史に残る激しい論争を繰り広げた。

J.M. ケインズ (1883-1946) は、貨幣経済に内在する本質的な脆弱さを指摘し、政府による市場経済への機動的介入が資本主義存続のために不可欠だと説いた。ケンブリッジの知的エリートとしてのノブレス・オブリージュを貫き、時々刻々と変動する経済課題に対して、ときに矛盾と受け取られることも恐れずに解決の処方箋を提供し続けた、まさに知の怪人であった。

F.A. ハイエク (1899-1992) は、政府による市場経済への恣意的介入は、個人の自由選択が経済全体の均衡を実現していくという資本主義の前提そのものを危うくし、可能な限り抑制すべきだと説いた。敗戦の祖国オーストリアから英国、米国、ドイツそして再びオーストリアと放浪の生涯を送った。時代から忘れられた存在となった時期にあっても、個人の自由こそが資本主義の長期的存続に欠かせないとの理想を貫きとおした、まさに知の奇人であった。

二人の論戦は、両者の在世当時にあっては、未完のまま終わった。

その後の時代は、ケインズの経済思想の隆盛期（第二次大戦から1970年代まで）、ハイエクの

経済思想の隆盛期（1980年代の冷戦末期から2000年代）、そしてケインズの復活期（2000年代の金融危機期）を変転した。

現代の世界は、金融経済の膨張とグローバル経済の発展を経て、二人の時代と同様に混迷の中にあり、両者の経済思想を二つの軸にしながら経済のあり方が議論されている。怪人と奇人との論戦は、今日においても継続しているのである。

## 2. Keynes versus Hayek

怪人と奇人は、いろいろな面で対照的である。

### (1) 運命に対する考え方

「ケインズは、人間は自分の運命を制御すべきものだ」と信じていた。ハイエクは、人間は経済やその他の自然法則に従って生きざるを得ない運命にあると信じていた。」  
(本書より評者要訳)

### (2) 楽観主義者と悲観主義者

「ケインズは、権力の座にある人々が正しい決定を行えば、人間の暮らしはそれほど苦しいものにはならない、という楽観的な考えを採用していた。ハイエクは、自然の法則を変えようとする人間の努力には限界があり、いかに良い意図に基づくものであっても意図せざる結果を生みだしてしまう、という悲観的な考え方に依っていた。」  
(同上)

### (3) 大英帝国のエリートとハプスブルグ帝国の復員兵

ケインズは、ケンブリッジの知的エリートとしての祖国イギリスへのノブレス・オブリージュを貫いた人物である。彼が戦い続けた時代とは、大英帝国が二度の大戦を経て世界帝国としての勢力を失っていく時代であった。彼は偏狭な国家主義者ではなかったが、疑う余地なき愛国者であり、イギリスという具体的な国家と社会が常に関心の中心にあった。

ハイエクは、ハプスブルグ帝国の復員兵であった。多感な青春時代（なんと18歳で従軍！）に生命を捧げようとした祖国は亡び、成年後の彼はオーストリアから英国、米国、ドイツ、そして再びオーストリアと渡り歩く。ハイエクは、アドルフ・ヒトラーと同じ亡国体験を持ち、チャールズ・チャプリンのような放浪の生涯を送ったのである。最後まで祖国を愛した形跡（糟糠の妻と離別し、初恋のオーストリア女性と再婚）を残しつつも、彼にとって国家とか社会は抽象的な存在であり、その視線が常に個人に向けられたように思える。

#### (4) 政治との距離

ケインズは、政策提言者として現実の政治に深く関与した。しかしながら評者には、彼が、現代民主主義の難しさにごこか鈍感であったように思えてならない。

ケインズは、ハイエクへの手紙で計画（管理経済）についてこう語る。

「計画というものは、リーダーと国民の多くが貴殿の語る道徳的考えを共有する社会において実施されるべきものです。緩やかな計画は、これを担う人々が道徳的なことながらを正しく持っている場合に安全なのです。」（本書引用より評者要訳）

彼の経済学が「モラルのある社会」を前提とする旨を表明しているが、この条件は彼自身が非現実的であると指摘した新古典派経済学の前提条件と同じくらいに難しいものではなからうか。

ハイエクは政治に関与することはなかった。しかしながら、ハイエクの信奉した自由の権利は、「大きな政府」を指向する進歩派政治家た

ちによって、黒人などのマイノリティの人々に拡大されていった。

#### (5) ボスと一匹オオカミ

ケインズのまわりには「サーカス」と称される弟子たちをはじめ、常に人が集まった。

相当な自信家であり傲慢とも言えるような性格だったようだが、彼は常に人々からボスとして担がれる存在であった。その魅力の源は、華麗なまでの知性であり、資本主義変革への使命感と情熱であったであろう。加えて、ケンブリッジの伝統を継承した知的な懐の深さが、ほかならぬハイエクの言葉で記されている。

「ケインズとは激しい議論をしたが、彼は私に対して真剣であり、いつも敬意を示してくれた。彼は、私についてよくこう言っていたらしい“Off course he is crazy, but his ideas are also rather interesting”（もちろんアイツはイカれた奴さ、でも考えていることはナカナカおもしろいよ。）」（本書引用より評者意訳。英語が味わい深い）。

ハイエクは一匹オオカミであった。長い不遇の時代にあっても、その考えがぶれることのない頑固者であった。筆者は、ハイエクが、ケインズ経済学全盛期に学生たちからも「中級の経済学」と侮られて真っ赤になって怒るシーンを紹介する。変わり身の下手な無器用な人物だったのだろう。

評者にとって興味深いのは、ハイエクがケインズとの論戦を経て成長していったと思われることである。

ケインズとの論争におけるハイエクの主張は、ウィーン学派の伝統を超えるものではなかった。ハイエクは、論争のクライマックスになると期待されたにも関わらず、ケインズ「一般理論」の前について沈黙する。筆者は、ハイエクは「一般理論」の強烈な創造性に圧倒されたのではないかと推測する。

そして、ハイエクは脱皮する。個々人の知識や情報は限定的、部分的なものに過ぎないが、市場での交換をつうじて相互に補完をしあい、社会全体としての知の進歩を生み出していく。

ハイエクの経済学は、市場の情報機能という独自の視座に進んでいくのである。

怪人ケインズとの戦いを経て、優等生ハイエクは奇人ハイエクとして生まれ変わった。

評者にも、そのように思えるのである。

### (6) 線引きの問題？

そして著者は、ケインズがハイエクに送った手紙から二人の違いに言及した部分を引用する。

「貴殿もお認めのように、これは線をどこで引くかを、という問題です。どこかに線は引かねばならず、論理的に極端な線引きというものはありえない、ということに貴殿も同意されると思います。しかしながら、貴殿は線をどこに引くか、について何の道筋を示されません。貴殿と私が、おそらく異なった位置に線を引くことは事実です。私の考えるところ、貴殿は中間的な道の現実性を過小に評価しておられる、と推測せざるを得ません。」(本書引用より評者要訳)

この評に、なるほどと思いつつも、要領が良すぎでちょっとモノ足りない、と感じるのは評者だけだろうか？

## 3. Keynes and Hayek

怪人と奇人には、いくつかの共通点がある。

### (1) 人間は不完全なものである

ケインズは、人間が不完全な存在であることを、次のように洞察している。

「個人が各自の経済活動において、永年の慣行によって公認された『自然的自由』を所有しているというのは本当ではない。世界は、私的利益と社会的利益がつねに一致するように、天上から統治されていない。」(「自由放任の終焉」より評者要約)

「自分自身の目的を促進すべく個々別々に行動している個人は、あまりにも無知であるか、あるいはあまりにも無力であるために、そのような目的すら達成することができない。」(同上)

このように、楽観主義者とされるケインズは、現実の人間の知性を全く不完全なものである、と言い切っている。

ハイエクも、人間の不完全さに思想の基礎を置く。

「個人主義哲学は、『人間は利己的でありまたそうならねばならぬ』ということ的前提としているのではなく、一つの議論の余地にない事実から出発するのである。それは、人間の想像力には限界があり、自身の価値尺度に収めうるのは社会の多様なニーズ全体の一部分にすぎないということである。また、価値尺度は各個人の心の中にしか存在しないから、常に部分的なものであり、それぞれの尺度は、決して同じではありえず、しばしば衝突しあうものとなる。」(「隷属への道」より評者が要約)

このように、理想主義者(ユートピアン)とされるハイエクもまた、現実の人間の知性を理想からほど遠いものだという事実を正面から認める。

両者は、人間とは不完全な弱い存在であり、その人間がつくる社会も混沌に満ちた脆弱なものである、という認識を共有する。第一次大戦という未曾有の惨劇を目のあたりにした二人にとって、19世紀以前の科学者のような(ある意味で無邪気な)人間観は持ちようがなかったのだと思う。

そして、評者は、この人間や社会に対する謙虚な見方こそが、二人と各々の後継者たちとの最大の相違ではないかと思うのだ。

すなわち、ケインズ的思想の後継者たちは、政府の力というものを過信しすぎた。そしてハイエク的思想の後継者たちは、市場の力というものに傲慢でありすぎた、と言えないだろうか。現代における両者の後継者たちの論戦が必ずしも時代の問題意識に応えきれていないとすれば、ケインズとハイエクの原点=人間も社会も不完全な脆いものなのだ、という認識に立ち戻る必要があるのではなからうか。

### (2) ニヒリズムの否定

もうひとつ両者に共通しているのは、ニヒリズム（虚無主義）に陥ることに強く抗していることである。

ケインズは、経済と社会の未来像を次のように描く。

「われわれは宗教と伝統的徳にかんするもっとも確実な原則のうちいくつかのものに向かって、自由に立ち戻ることができる」と私は思う。すなわち、貪欲は悪徳であるとか、高利の強要は不品行であり、貨幣愛は忌み嫌うべきものであるとか、明日のことなど少しも気かけないような人こそ徳と健全な英知の道をもっとも確実に歩む人である、とかいった原則にである。」（「我が孫たちの経済可能性」より評者要約）

そして、理想を実現するためには偽りや悪徳とされるものも利用してやる、という凄みにあふれた覚悟を表明する。

「しかし注意して欲しい！以上で語ったすべてのことが実現される時にはまだ至っていないのだ。われわれは、少なくとも100年間、自分自身に対しても、どの人に対しても、公平なものは不正であり、不正なものは公平であると偽らなければならない。なぜならば、不正なものは有用であり、公平なものは有用ではないからである。貪欲や高利や警戒心は、いましばらくはわれわれの神でなければならない。なぜならば、そのようなものだけが経済的必要というトンネルから、われわれを陽光のなかへと導いてくれることができるからである」（同上）

この言葉からは、頭が良いとされる人間ほど逃げ込んでしまいがちな虚無主義の対極にある、なりふりかまわぬ強烈な使命感が伝わってくる。

ハイエクもまた、虚無主義に屈することを自らに許さない。

「異なる知識や見解を持っている個人たちの間における相互作用こそが、思想の生命というものを成り立たせている。人類の理性の成長とは、個人間にこのような相違が存在していることを基礎においている社会

的な課程なのである」（「隷属への道」より評者要約）

「このような個人主義こそ、上述した社会過程に対する謙虚な態度であり、また、他の人々が持っている意見に対する寛容の態度であって、社会的過程を包括的に管理せよという要求の根源に存在しているあの知的傲慢とは、正反対の立場に立っているのである。」（同上）

個人主義とは、人間の不完全さを謙虚に認め、多様性への寛容な態度を守ること他にならず、これこそが理性の発展を可能にする。ハイエクは、その理想を揺るがせることはない。

### (3) 知の自由と多様性への寛容

ケインズが、知の自由と寛容というケンブリッジの伝統に生きた人物であることは先に述べた。また、ハイエクの個人主義、市場主義の前提には、上記のとおり多様な価値観への寛容がある。

何より重要なのは、これら知の自由と多様性への寛容が、ときに苛烈な論争も辞さない覚悟によって支えられていることである。思考を停止した付和雷同は、知の自由と寛容の敵である。二人が身をもって示したのは、こういうことだと思う。

### (4) 貨幣経済への深い考察

そして、経済学者としての二人に共通するのは、貨幣経済の本質への深い考察だと評者は思う。不完全な存在である人間が、未来への悲観と楽観に揺れ動く中で、貨幣を過剰に保有したり手放したりする。このことが経済を常に不安定なものにする。

貨幣は、資本主義の発展を可能にした基礎の一つであるが、同時にその急所ともなりかねない。そして二人の生きた時代は、資本主義が地球規模に拡大した結果（帝国主義）、貨幣が金属から独立して一人歩きを始め、人間の手で（能動的にせよ受動的にせよ）管理せざるを得なくなった変動期であった。マルクスが考察したのは、労働者が生産手段から切り離されたあとの

経済であったが、ケインズとハイエクが考察したのは、金融経済が実物経済を凌ぐ規模となったあとの経済であるように思う。彼らの問題提起は、今日においてますます重いものとなっている。

#### 4. つないでいく責任～豊かで不安な時代の貨幣愛を超えて

##### (1) 双頭一身のリヴァイアサン

現代世界においては、市場と政府は相互に深く結びつき影響し合っている。市場が恐慌に瀕すれば国家も動揺せざるを得ず（例：リーマン危機）、国家が破綻に瀕すれば市場もまた危機に陥る（例：EU 危機）。

また、国家も市場も巨大化し、国境を超えてつながっている。遠い国の危機（例：ギリシャ）であっても、あっという間に日本に大きな影響を及ぶ。グローバル経済においては、対岸の火事はもはや他人事ではない。

さらに、個人の生活の基盤は、大きな市場（例：物質的な繁栄）と大きな国家（例：福祉制度）の両方に置かれている。先進国においてこの事実は既に公認のことであり、途上国もその道を追っている。

市場と政府は、いわば双頭一身の怪物で、お互いを欠いては生きていけない。二つのクビ（市場と政府）が噛みつきあえば、一つしかないカラダ（国民生活）は死んでしまう。

##### (2) 増大する不安と貨幣愛

ところが、冷戦終了後の世界においては、資本主義と民主主義の勝利のもとに歴史が終焉するとの幸福な予測もされる一方で、この市場と国家の複合体が意外にも脆弱であることが白日の下に明らかになった。

我々のような個人は、豊かな時代にありながら、この複合体が崩壊したときの恐怖に閉塞している。未来を見通せない不安が増大する中で、投資や消費を回避し、稼得し蓄積した富を貨幣としてせっせと積み上げている。そこには、貨幣が将来においても減価せず、かつ万能の交換

手段であり続けるとの期待がある（国債も、国家の信用力を最終的な担保とする点で、貨幣と極めて近接するものである）。

そして、この貨幣愛が不安の中で大きくなり過ぎると、総供給と総需要の乖離をもたらし、経済全体を縮小サイクルに追い込んでしまうこと、ケインズとハイエクが洞察したところである。

##### (3) 不完全さを直視し、ニヒリズムを超えて

それでは、我々はどうすれば良いのか？不安な時代にあつて貨幣愛が大きくなるのは、ある意味で仕方のないことである。

経済政策としては、さらなる金融の量的緩和に対する期待が高まっている。もとより貨幣信用を維持しうる量的限界というものが先験的にはわからず、気がついたときには不可逆的な貨幣価値の下落が生じかねない。各国の中央銀行は、目前の危機対応と将来の危機回避の狭間で苦闘を続けている。

評者は、あまり科学的ではなくお恥ずかしいが、個人それぞれが貨幣というものの意味をよく考え直すことが大切だと考える。人間は不完全なものであり、その人間が作りだした貨幣もまた不完全なものである（例えば、基軸通貨である米ドルの価値が一定ではないこと、子供も知る事実である）。

人間が将来に対して抱く不安は、貨幣「のみ」にては解決されない。どんなに不安が大きくとも、今日を良く生きるために消費し、明日を良く生きることをめざして投資をしていくこと、つまり虚無主義を超えて現実主義と理想主義に生きることは人間の使命であり、同時に特権ではなからうか。

その過程で拠るべきは人間の知より他になく、それが不完全なものである限り、知の自由と多様性への寛容は欠かせない。

##### (4) つないでいく責任

現代社会は、民主主義にしる資本主義にしる、どうにも厄介で面倒くさいものである。評者などは三日に一度くらいこういうボヤキを繰り返

## 書 評

す。しかしこのボヤキは、今日の自由で豊かな経済社会に生きることを、当然の権利のように誤解した者の甘えと驕り以外の何物でもなからう。

評者が改めて自戒したいのは、今日の自由で豊かな経済社会に育った者の責務として、この経済社会を（いかに不完全でも）より良い状態で次の世代につないでいくことである。

たしかに経済は成熟し、社会は複雑になった。かつてのような高度成長は難しいかも知れない。しかし、成長なき経済が進歩のない社会であってはならない。人体と同様に経済社会も、成熟

すればするほど無理を避けつつも運動を怠らず、体力低下と新陳代謝の維持に知恵を絞らないかぎり、あっけなく血管が梗塞してしまうだろう。

評者が思うに、人間が貨幣を愛し続けるのは、それが人間同士の関係性を担保する（他者から財を得る）手段だからではなからうか。そうだとすれば、他者との関係性を、不完全なものである貨幣のみに頼ることは危険である。

他者、より具体的には未来をにう世代の胃袋とか心の中に富を貯蓄（投資）していく、という考え方と仕組みが、今日に経済社会において何より求められているように思うのだ。